

## 中世補陀落山浄土図の様相―雷神・龍の意義について―

佐藤優（大阪大学）

補陀落山浄土図とは、観音菩薩が住むとされる南海・補陀落山の壮大な景観を描いた浄土図のことである。山頂には観音の住まう宮殿を表し、山中には谷川が流れ、色鮮やかな果樹が生い茂る自然豊かな場所として表現される。補陀落山の様相を描いた現存作例は、写経見返し絵や厨子絵など近年発見されたものを含め、管見では14点確認でき、とりわけ中世の南都周辺で描き継がれた絵画主題であった。

当浄土図には雷雨を神格化した雷神が山上付近に度々描写され、同様の性格をもつ龍の姿も描かれている。その意味や典拠については長く不明とされてきたが、近年、補陀落山に表される雷神や龍、摩竭魚といった海獣に関して、観音による諸難救済を説く『法華経』普門品の図様と共通していることから、補陀落山に辿り着こうとする者に対する障害の象徴であるとの説が提示された。本発表では、それに対して、雷神等を法華経絵に由来する諸難の意味として捉えるのではなく、補陀落山全体の様相を記す諸文献に注目し、あらためてその図様の意味を検証してみたい。

当浄土について記述する経典類を概観すると、主に①水源豊かで種々の花樹が生い茂る清浄な場所として認識されていること、②山の周辺に住す異類禽獣が慈心を具えること、③聖賢が多く住む、といった特徴が挙げられる。さらに、先行研究では取りあげられてこなかった補陀落山の様相を詳述する『行林抄』（静然撰、仁平4年〔1154〕成立）に注目し、特に上記②③に関する補足を取り上げ、南都成立の補陀落山浄土図を想起させるような記述が多く見られることを指摘する。また、補陀落山往生を強く願った解脱上人貞慶（1155-1213）は、著書『観音講式』において、補陀落山に仙人、護法神、天龍が存在し、修行をなし観音の説法を拝聴しているとイメージしていた。以上の分析より、雷神や龍を含めた補陀落山周辺に描かれる異類が、水源豊かな補陀落山にふさわしい、慈心を具え観音を助ける善神として当時の人々に捉えられていた可能性を提示したい。

なお、雷神のみを表す補陀落山浄土図の作例として京都・海住山寺本堂の旧壁画（文明5年〔1473〕成立）が注目される。本図は13世紀初頭の貞慶在世中に作られた原本を受け継ぐとされ、南都に広まった補陀落山浄土図にも影響を与えた可能性が高い。また、本図の補陀落山の山容に海住山寺の姿が投影されているという先学の指摘があり、その山上に描きこまれた雷神の意義も改めて検証すべきと考える。本発表では、海住山寺や木津川関連の諸文献をもとに、雷神が当地域に由縁のある水神であったことを指摘し、本図に描かれた意味について考察する。